鳩谷三志翁勸善錄

岩手縣立圖書館之印

吐 9
2142
3 上

2/22
3

勸善錄卷之下

岩手縣立一關中學校

目錄

一 下孫国香取郡神崎氏里の孝義夫婦の事

二 同郡依原氏里氏本妻を捨て妾を娶やしの事

三 同郡大崎村の孝子夫婦の事

四 同郡依原氏里の經箱屋吉兵衛つ並妻子氏の事

五 同郡押砂村の七郎右衛門つが妻名ん女が孝貞行狀氏の事

六 同郡小見川村氏五左衛門が妻よしのの事

七 同郡大崎村の孝子清次郎夫婦の事

奉賜文庫

八 下野国宇都宮城柳原村の武左衛門が事

九 同村の七郎次が事

十 同国宇都宮城下押切町に寄屋宗兵衛が妻くるが事

十一 同下野地町に下野屋文作が後妻同国鹿沼に里人平義が事

十二 同国宇都宮曲師町の勇助が事

十三 同国鹿沼里の筏宗四郎が娘ぎまが事

十四 同国河内郡江曽島村に吉左衛門が娘ゆう が事

十五 同郡壬生村に吉左衛門が子然次郎が事

十六 同郡小林村の[illegible]兵衛が娘りんが事

十七 同国宇都宮押切町金田屋勇左衛門支姉のが妻に成る

十八 同国宇都宮城柳原に平左衛門が後妻に成る

十九 同郡柳原村の祐次が事

廿 同国宇都宮南新町に義七が妻ちよ和こ助が事

廿一 同下大町に金兵衛が娘つるが事

廿二 同国古河村の惠左衛門が事

廿二 同村れ名主栄次郎が娘ちかゞる
廿四 同国塩業村れ捨ゝ屋がる
廿五 同国河原谷村の清右衛つゞる
廿六 同村れ今屋平兵衛夫婦ゞる
廿七 同国上戸上村れ若狭の古代事
廿八 同国宇都宮の岡本宇左衛門父子が事

勧善錄巻之下

東都

知非齋源與清文儒著
赤松知則 門人
関常政 校

一 下総国香取郡神宮れ里の義左衛門が子に子義左衛門あり。父八十九歳の老夫にて。十七八年世にあるかひをつとむる力もなく一ぽとなりてたゞうべけるとも。子義一日もれこたりたゞく一家ゞ仕ゝめけり。母八十一年およ中風をもづゝひて身まうのトゞかれ看病いとゝくしけり。子義癸しけれバ至ハ人れ屋くとゝちり。妻ハ子郎左衛門業して父とや

一なひけり。かゝる孝子なれど。いうなるむくいまや者は戸
にて百姓代金と引負一。ぞる家つくのひかへにべたと
とゝなりぬされど貧人はれる家いうにても御者なるよ。村
内は尚人稼四郎日雇賀の家がーたなりけれバそれーて
七ぬ武分弾の引負金新貫おとつくはひけり。子義齢
四十四歳まで妻もなくて父を孝養しけるとゝ父
いたくなげきて。いうで妻あるとむうへいくけれバそれん
ととゝむとゝぐく。ふれ村の源兵衛が女だんといへるとゝを
ひり。だんも孝心ありて女なれど夫なりとなん。

二 同郡佐原里の本木百姓が妻やえ。孝貞ふくゝ
て。称誉ひゞとゝるまひいとゝ。養母重病にて
て。九月の間まづひむづかりけるとゝ。まめくゝく看病や
とゝ。若又は家業怠慢とゝなゞーてようろこびけりとい
へり。

三 同郡大須村の新兵衛夫婦はものいとぐひおとは若人
まて。家業とゝはげゝ。人の為よかとつくしたとゝとゝ
といへり。

四 同郡佐原下宿後箱屋政右衛つゞる合次いうゝづかは九歳
は家なれど。父母の行ふを習て孝志のゝとふゝ。父政

右馬つ篤実者人の者まして。近頃の小児まとと家にあつめて。月よりたびづく孝行れるすどもかたくしあへりとなん。文政二年れ春今年が母の病女人まお起れ心配まして。百ケ日の間。年れはまいれるまで別食はれ。しーゆるぐ。四月十七日日光まうでせんとはるとより。今年れつやう母浄所食中接待ゆうべ此身つかれなまべー。来りまりて所食の行つとむべーと待ひるよ。父母も初年れ志の所食せんい不便なれど。志とやぐんもおとなーとて。今年ぐるまにゆるーけりとなん。

五 同郡押切村の七郎右馬つが妻名ん女ハ。孝貞の心ふかく。それ行状人れ稚とはべれと。世ーー。七郎右馬つよ従いてより。又政二年まで。サセ七年れ月。一家も相見極山に出ーーとなく。又寛永家へ三年に一度づゆけど。一家もとまりてかへりーーなるーーなー。村元は疫あれど。母夫は苦しーれれめちちみせび。行くれは使役とまりて。ひとつもそーーりつべれとなーーといへり。

六 同郡小見川村の百姓右馬つが妻ハ。同村れ三河屋安右馬つが姫ど。父母まるつかへて十八ま孝貞の誉志世はたぐひんくなー。夜邪てれ後もなく父母れ月さあたるけいひいるるハねぐるとなー。そハ父母用ありてはたらんとれ。

いくせびか不便なるべきこのんーらひこまくまま玉造
社四月稲荷の大明神よりの豆腐ことありて。一七日引合せり。
のんおのふやうかくまれ引合ーるつも家れあるよ初ものなり。
こゆもつんぐんぐべにあるべびて。家業といてーみなりぐ
ゆもて引合ーして。まるかとそへひりとちん。

七 同郡大崎村れ蓑清まゆの者ぱたぐひかに若人にて。
家業をとげこんれためよかとつくひとをいとびまま
ゆまれ一月より四日づくはんまとと貧に日と言て高家
なぐの農ずわくれたるものを助ひつまるゆ礼強要を
食などよ拒ずこーして。豆腐れくいと添ーとなん。

八 下総国宇都宮郡柳原村の武右衛つハ心廉直にして。
孝行信義の人なり。若よ在時より家ゆたるゆ堰。ずれなーな
どれ。趣て人馬れ見そこなふべ死ずとを捨。又ハ倒れ毀れ
たるとを繕ていなよいそがーしれけといへども。これとを又ゆ
ーとなりーつ。又四よるをとゆ引まかひるよ家人の差別なく。
たぐ前れたりよれをんをと用て村中趣作れ若他とね
ぐべり。寺貢ハ年ゆに初稲米をとりてなり。土をとりやまひ。
友にもぐとるに誠あり。それ又をぐめまをとむかへーが。
故ありて一年ばかりるとて去ぬ。それ後の事武右衛つとば
せけるゆ。弟嘉も貞操をとまりて。遂よ他まに従ひば

してやりめにてるしけり。武右衛つ父母にそやくおくれ
たれいぜめてかれ父の菓実れ姫とだくよやしなひまゐ
せんとそ。くしてその志と告げるよ。姫さそ義よそむけち
とてまうこび。されど武右衛つたえび儲て。実母ごく
孝養せりとなん。

九 同所柳原村七郎次ハ。貧れ行正しくて。人をめぐむ
心深き者人。村内は農すれくれたるの頃れば。自己れ
業と捨置て助ることを。多くは米穀と貸て。これを
元かへしとなす。故内れ五十人あり。ことごく富に
似たる者人。七郎次齢八十四歳にあよべども壮健にて。

いまだ災難よ逢ざるハ猿若れ、誠たるべし。

十 同国宇都宮城下れ押切町の商屋宇兵衛ハ妻をく
女といふ。孝行貞節の心深かりけり。姫一人あり。名をよ
ね女といへり。支行あしくして。年ごに借銀つもり。父母妻
子をさごくむべた術なけれバ。遂よ多を故かして行方
をくらびたりにけり。妻れくく女にべたかるさちく。隨れ
れ物れ見ざ小さらと。男の志すをとをくつとめて父母
始ときと出けり。十年れるよ父母も多まかりけるにそれ着
帯をとさ下めて平者人をつくれ行うさ由。云にもいひつ
くしがたし。と歎れ人いと心ぐるしく扶ひけれバ。彼れ

夫をむかへすくしくむれどさらにうけひくことなす。さるかたに夫宋元湯人れぬとなりて江戸に住す。それにて生て清貞しけり。夫も妻が貞元孝義れ始孫を安て。涙を流しあやまちを悔て。色こうんを改て君につかへ。ふたたびお許れ今をを。妻れ許へ却くりけり。さて十年経て後。人ありて宋元湯が借恨せしくをるれすしなげ死て。宋元湯を亦よ恨しむ。宋元湯ふかく妻に恩を謝して。むつまじくて住けるをどにやうく家れ業もゆるかよ成りころをひ失れ災にかうりて。拘ひとつだよ孤らび焼まけり。されどこれ積悪れむくい

なめりと悟て。夫よなげ死なすまじいよくんをさてげみて業をつとめしぶ今ハ是ハあことなくてをん住けるかく妻れ孝貞のんよう。夫をも涙て妻心ふかへらしめたるハ。ふたたびをたりか。

十一 同所れ鉄炮町の名をハ。狂歌をぬて号をと下北庵玄住といへり。七十に却よべる老母よつかへて孝れ心深し。常に月をみてハ千里れ外まで思しまひ。あをとのふだ雪をみてハ春まれ鶯をしよろこび。花をみてハ哀れうのをるしとめて。あざかりもいかづれ風流よ却ひとをよせば。その心をしして。人れ若うをと賞し。恐孝貞伝れ

抱伏さと考として。かりそめにも無ることかたることなし。
一とせ飢饉の年須佐のそれ郎さと話て。だ孝なれたんのうへとひ
ゆるをとり。字拾郎の悔えの表裏しかまひ。拾めぐませ
なまひけることなどあまるかたり出ける中に。同郡麻沼
の里人孟嘗が子は平義といあり。初より孝れ心ふく。
母づかの菓物商して父母を養けり。父酒をなければ。己が
身を縛てねこに酒法てひめろう。ひべて父れ命をう
けざれバすをなをなバ。かくまめんれ男なれバ。妻も
子もえんまねび。家こぞりて若人と平義年サ九れをれ。
父七十にて身まかりぬ。平義いかくなげれ。日ふて墓参

して一日も怠ことなす。父死て後ハ行ゆも母れ命をと
まりて。己が心づくるを母をなすことなす。かく孝の人な
れバ。そのむくいはや。田畑も拾め居借れ貧人なりしが。
やうくは家福をなて。富家といなりぬ。さて母は孝を
つくしも。父いまし時はハやうくさりてゆくなりけ
れバ。孝は父れ母をさぬすしかり出てなげれそう。母も
年八十一すして身まかりぬ。されは父世をを去て後廿ニ
にれよべども。一日も墓参を闕ことなく。母死て後ハ二ホの
墓はまづるを毎日れつとめとせり。平義人をめて孝
行よ。ふれ孝死をとりといへども。門是たるは同村の人

と頂て泣しけり。母はれ人これを辞讓れども不可
して。一人呉ぬるさば泣りねぐなと。二人呉ぬること
つまやあるとて。人れ学とをいとひ。いとくはるがる紀
心ざくにこそ。

土 扨ケ子人れものがたりに。字於文曲所町れ飛治伊系
ぐるとと要助といろ。母ハまやくく世とを去ぬ。父伊三郎八十
にあまり。老衰ふ所て勇併自由なるべ。それうへに老
がけてさまぐのくねりごとなどいへど。勇助はこ
もそれ心よはがさび。をれ家紀衆の涙ぶしして膚と
あかるあさを。五れあつ紀日ハ兩とまなるべしてべ

しかく〳〵しむ。あいと愛しくそなたのひ心はまつとれど。
父が目さめかるとりハかくをさらびるづかよ眠れ
るかどとうかぐひて飛治のるぐとをしつ。いとかぐ
そくて伝ひりかく愛しく紀まだしなめるも更はなむ
ことなく孝れ心深かるぷ。わふと紀るぐにな。

土 同人れ法よ同国麻沢れ里の義ふる四郎が娘はと
ま女とりよ。初ちて母をおくれ。祖母はやしなはれ
てひとくなりぬ。父ハ業にいとまなくて家に居らびて
ま岩よ祖母の側よ居りてつかへ。父義より海りし
とをり。ひまが紅粉料れ渋などなるぶ。ひまこれをあれ

用にせびして。祖母れにはかなしく抱き愛てけくめ。祖母
がはのようまーとて嗜をといと嬉しく記るまんよろこ
びけり。年十六七にもなりしころ記とれこらが
けさうにるとも。かつうえだよせびて身をこのしくしい
さくかも世れそしりにあふことなし。食物も飯と汁れ
ずよはめぐりれ拍もそへびしてくひろ。祖母と父と
にハ汁れ寒とまねーせ。自己いつゆれこをと悔けり。祖母
手老て杖記ふしーに自ゆなるーび。二便もとげくて。救
ハ六七度はあまりて起出るをとよく分抱しー。夜ゆし
がーに月もあるねど。夏も夜眠せび。よく紡績のまざをと

つよりけり。を郡の人ハまが色と食とに礼れば。救うま
いねせるど夏ねどなれ面かちせぬを感ぜざるハなし。
祖母いと嬉いさくがひて見めぐみ。とく不自ゆるり
しかどよくく分抱して仏ととろ。九十八歳にて世を
終るまで。一日も怠なく善表しけるハいとなれを記
まざりや。

㊀同人ハ後ハ同国ハの内敦江曽嶋村の吉左衛つが娘
をゆーといへり。それ才に五昇右衛つとゆ人あれど。
齢いとれそれなれバ父の嗣ハ忘がくしとてゆう女が年
廿一れ時。婚をとりて家をつがしめけるが。家ありて不

どもすく離縁しけり。ゆゝしかるべきやうに。家業しけれ
ば。尋むことゝんとたのもよかるべきねば。初は才とゝ取
しゝ立て。家をつがしめんにとかゞとて。寡婦をそはく
れれしるぞとつとめ。父母とも喜びけり。やがて家業多
まかりしかど後のまとむうべとゝ。くしくしめけれど。
貞伝れ志をとゝまりて。ちたがもび。ちゝハ父とゝに農業
をいとゝしみ。家ハ編績れまぎれとかゝびして。父祖の
世より伝くなる田畠をいとゝかもうしなふことなく。
才をとかゝしゝ立ちうゝ才やうゝひとゝかたゝしゝこゝろ
ちしよ及でハ父おいおとろへたれど。才もるれ行西

しくて。農業をつとめけれバ。ゆゝ大よろこび。母の
れハ女れとゝまぎをいとゝ。才ハ男れ業をつとめて。
父をとゝやしなひけり。父ハおいがけてなぐ傾会れこゝの
しみをしけれバ。それ日よかなよ和をとしくもるをと家
多れ勤とん。辺出まして父が食物も心よまうせねど。父が
物かしをとつをすりハ。赤井をもいとゝび。一里ばれをと
孫て。字孫をれ町まを歩て物をくのへてしくめけりと
なん。

同人れ伝ふ同郡春彩田村れ右右傷つがるをとゝ然
不幸といつり。果天ッたりしるは父多まかりしかば。

それ母然次郎とゐて夫が実父れ吉郎よかへろ。ふかくび
同郡新田村の七十郎が妻となり。然次郎ともつれ
るようて来けり。さて二四年経て後。七十郎目しひて
農業とと勤ることかくなびく。母も病がちなれば。すづかに
十家でかりれ然次郎妻が農をすることもしるれみて。
いとあやしくて仕けり。されど然次郎孝の心深く。目
暗れ養父よくつかへ。家他業に出るはも。父れさび
しがらんるとおもひやりて。幸てかりてそれ心と慰
めくり。母ハ心ざまはしく。七十郎が目盲たることたく
ひて。夫が父れ郎よりうぬ。然次郎まいざ実父と

捨てそれに従へとしきめけれど。たくく実母れ心よりてと
も目盲たる養父をと捨んことかいとなくびとて。仕
養父よつかへてもぐくみたり。村も母ら褒なるもとに
くみて。それすとかくびくたくさんと振立ければ然次郎
大に怒るれなげた。母と連て養父の家よかへくしめ。
とめは養父をやしなひつ。いとむつまくて仕けりと
なん。

◉同人れ住る同郡小林村れ百姓ら娘よかん女といまう。
住を重つといふと婿よとりてひとりれ娘とうめりその後
父れかを儒も。夫の住家つも多まりぬ。家いとまづし

かりしかども。貞孝とまのりてぶやくびまをめけび。寡婦にて母に孝をつくしやしなひけり。姑やうく生えて。市右馬つとつまと聞にとり。母子三人たちいひをいそしみければ。いと貧かりしもやうゆるかにたりにけり。母おいおとろへて。おれ命は出ることなくこのり居るよ。孝子侍ると離れびして。行くれどころともちひなぐさめけり。又母のれさりがかたるすありて他所へ行はい出にもへにもことれよりとくハしく母よまうさびといふことなし。母たまく他所へいでんとつとりい。或いはと川。或い背負て。孝でかりもそれ心にもとることなしといへり。

■同国宇佐宮押切町に倉田屋勇右馬つとつまのあり。父ハ彦太郎つとて。彦起れ名をとゆうしがるい引かていと彦孫れ男ちりけり。勇右馬つ三志が門人にたりて。人に孝貞れをとをとれさとしけりそれ素彦ごとにいれどもつまて。人は孝貞をとくしるものがく彦孫けるやうやハあるとてれしり出こしけり。勇右馬つも理に従ひて。口をとをとがてぞけりけるやうく手月はそへて素もの心やりくだ。夫まるを言やしいかりけりと恨てそれ活いいひくくだらもせび。彦れ逆遠は烟草の火をたなく出れけりまもそれ志まめで

そげまされて。そハ紀起れ勇右衛つといそれたるとそ。

(六)同国宇佐郡柳河原の同屋平右衛つが妻。産後より多まかりし後。小児とバ人れ許よやりて養せけり。さて後妻ととしかへ〳〵れ。ゆゑなく〳〵みてをうみけり後妻より後て。ほが生るをとくよやしなはせ養れるとおもむうへて。家乳してそだてみおそしけりとなん。

(七)同郡柳原村の社次といへるハ。祖父父母三夫婦おなじ意孝の家なり。年老行ふ〳〵おややけれ知ととなり。人まもどまるに信義ありてめぐみはられむ心ふかしといへり。

(八)同国宇佐郡南形町れ茂七が妻ほに卯こ助とて十四歳れ家あり。此家隣町れ孫兵衛がひくめにて。ふ谷三郎が孝学ととまなび。孝行世二にして。家業ととそげとけり。まゝ同志れ社中廿人許つどくて。孝に孝行れ学のゆゑよりかゝひろとなん。

(九)同郡大町れ合義とて。酒屋の次郎を業とするものなり。娘ハつゝ女とて十四歳なりけるが。孝志いとふかし。父母の中らひとをとりくたゞふるなどあり〳〵かど。つゝよく孫なぐさめて。今ハ親るむつまゝくてさかえけりとなん。

十四 同国宇都宮郡辺寺内村に惣左衛門とて、いと貧しきありけり。と都上篠村の秀義とて、年廿三歳の若き婦人の妻なりける。ぞくれまいたり。つかりまや。拘羽とたりて乳がそこ見るまひあまたびこがくてハいうなる様さまごとしいでんもたのまがたしとて。祝儀さかりて一向なる不仁邪悪こと云よはよべりされど本心はかへるべ記さまなる相ぞ。永く許し出ぬまでくせーと。寺内村の名主栄次郎と。これ惣左衛門いとあそれは甚ひいかるまして助だやとて。かれ祝儀はさかり。秀義と惣左衛門ら永にむかへとりぬ。さて惣内村のかつるもにんとつくして分抱し。神仏よ祈て療治しけるよ。そのとくるーて秀義が祖孔年金しけりとちん。

十五 同村れ名る栄次郎が姫ちゃいまづかは十歳なれどいと孝心ふかくして。父母まよくつく。母の歳せーは病くるーみを甚ひやりて。それ員の厚恩とをいひかーーみけり。又父母あをあと勇を浄て。父母れさかえを神仏よいれ祈りさちん。

十六 同国宇都宮郡辺寺内村の若者ぶが子捨を恐ハ。歳十歳にて三志が孝学の門人となり。師恩をなよ

とゝ。孝義世ニ其志ありといへり。

廿五 同国宇佐郡河原谷村より法花寺へ行の路ありの。それ山ざまよろしくて。村内田石ハ田の水れをみ引しゆるゝことを知れ。れがつとめとす。家人ハ其別なく人ゝと用ひりとなん。

廿六 如ず里ハ里ハ里に冷屋亭義といふものあり。夏如ゝに業人なりけり。それ毒牛馬ハ炎暑よくるしむとゝあられみて。其洗ふ水ハ人ハ飲のさくこひあつめ。大釜よりかして。糠とかれまぜ沸ハ門ゝ牛馬にあたへのませけりとなん。

廿七 同国宇佐郡上戸上村ハ兎義岩右衛門岩右衛門ハ孝義原次郎右衛門ハ孝貞ハ百余人が中に秀て行ひ正し。父母の命に背かずかりもすれることなく。又弟ハ実に起て。国男にむくいをゝんがためにとて。農業をいそしみけり。又休日あれば田畑に出てのりてゝざるをさし抜ひたゝとを標ひ見ゝ。往来ハ人ハ踐ざらんやうにとて用ひりとなん。

廿八 同国宇佐郡岡本宇義勝といへるハ。日用行ふ所へるゝ法ゝ。同郡の源次郎右衛門とゝ三志が教をうけて。志孝ハ其の学にんとふかめ。よく人ゝともをゝいさ

とせり。字義がよれ令五も孝心ふかきものなりと
いへり。

勧善錄巻之下終

松屋高田大人著書目錄

擁書漫筆　五冊　刊行
俳諧歌論　二冊　刊行
竺志舟物語旁注　二冊　刊行
十六夜日記残月抄　五冊　近刻
相馬日記　四冊　刊行
樂章類語抄　五冊　刊行
東遊　神樂
催馬樂　風俗
松屋叢話初編　一冊　刊行
賀茂真淵翁家傳　一冊　刊行
棟梁集　和文集　一冊　刊行
国鎮記　諸国冨士　一冊　刊行
隅田川御覽記　一巻　写本
積德叢談　一冊　刊行
歌躰辨　一冊　近刻
文躰辨　一冊　近刻
松屋筆記　五十巻　写本

同　二編　一冊 刊行

歌學大成　五十巻 未刻

更級日記抄　三冊 近刻

勸善錄　三冊 刊行

宇都〻物語　一冊 写本

文政三年四月発兌

江戸書林

伐草南馬道町　棗村半藏

京橋銀座二丁目　伊勢屋忠右衛門